
ぽつり、ぽつりと。～不倫＜薫編＞～

一未

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぽつり、ぽつりと。く不倫く薫編くく

【Nコード】

N8311T

【作者名】

一未

【あらすじ】

誰にも言えないことも、長い付き合いの美佐子にだけは言える。家族よりも女友達だから言えることがある。

（前書き）

「不倫」 R 1 8

の主人公がこちらでも主人公になっています。

「不倫」のその後のストーリーとなります。

> 桜、見頃だよ。明日とかどう？来れる？

美佐子からメールが来たのは昨日のこと。突然ではあったけれど、丁度仕事も休みだしすぐに返事をした。

> 行くよ

そんな風にして、何でもすぐに行動してしまう私を美佐子は羨ましいといつも言う。

そういう美佐子は、ナイーブなところがある。心の半分も言葉にしていなくてもいい。美佐子のそんなところが私からしたら、魅力だし羨ましい。

美佐子は私にとって大切な友達。かれこれ、20年の付き合いになる。

美佐子の住む街は、観光地として有名。桜は芝桜からしだれ桜。紅葉の季節もまた楽しめる土地。春と秋に、私は美佐子の街に行くことが、ここ数年の楽しみになっていた。

今日は朝から太陽が輝いてる。まさに快晴。観光日和。

大きなバッグに詰め込んだのは、読みかけの小説を一冊と昨日買ったばかりの小説。これだけでもかなりの重さではあるけど、一冊目がもう少しで読み終わる。だから、次に読む本も必要だった。そ

れから、水筒とチョコレート。化粧品にモバイルパソコン。
なにせ、片道二時間。ちょっとした旅行気分になる距離。

重いバッグをひよいと肩にかけ、家を出る。賑やかな街を背にして電車に乗り、読みかけの本を読む。それがまた楽しい時間のひとつでもある。

>そろそろ着くよ

電車の中からメールをする。途中、山を通る電車は圏外になり、メールを打てるのは美佐子が迎えにくる駅に近づいてから。

本ばかり読んでいて山の景色を見そびれたことを後悔しながら、小さな駅の改札を抜けると、すでに美佐子が来ていた。

去年買ったばかりの新車の窓を開け

かある

「薫！」

私を呼ぶ。

走り寄る私を見て

「相変わらず細いね」

開口一番、美佐子が言う。そういう美佐子も昔から変わらないスタイルの良さ。少しパープル系のジーンズは、形のよい足のラインがよくわかる。

「はぁーいい空気。晴れてるし、桜楽しみにしてきたよ」

大きな伸びを助手席ですると、濁ったすべてのものが澄み切ったように感じた。

＊＊

「お母さん、どう？」

ハンドルを握る美佐子の横顔に訪ねる。

美佐子の実母は、数年前からおむつが必要な状態だ。介護は想像以上に大変なものなのだろう。眠れないという美佐子の顔は少しばかりやつれてもいるようで、それが気になる。

「うん、まあ変わらないよ、ただね、もうそう長くはないかもね」
寂しげな横顔が痛い。

「薫の方は、どう？」

そう訊かれて本当の家庭の姿を言えるのは、この美佐子だけ。他の人には一切言えない事実が私にはある。そして、それは美佐子も同じだった。

「不景気で仕事がないし、お給料減るとやってけないから、仕事探してるかすなりところ。和也はやっと大学よ。旦那は相変わらず。まったくね」

俗にこれを愚痴と言うのかもしれない。それでも言わずにはいられない。鎧をまとい生きるのには限界があるのだ。

転職続きの夫、ニートだった息子……浮気した私。

「笑っていいよ、馬鹿な女って」美佐子にそう言ったら「笑わないよ。薫がどうしてそうなったかわかるから」と、顔色をかえずに美佐子が言ったのは、確か去年の春だ。

その時、美佐子が言ったセリフを今度は私が言う。

「何かあったなら、私には言ってよ。言うだけで心は軽くなると思うから。役にはたたないけどね」

「ありがとう」

信号を見ている美佐子の横顔は、疲れていたけれど、ポツリポツリと語り始めたときから、少しずつ顔色がよくなったように見えた。

「離婚したいんだよね」

ぽつりぽつり、語る人生。それは、私と美佐子、ふたりだけの内緒の人生でもある。

「人はみな、どこかに内緒を抱えて生きてるのかもね」

「そうかも。どんな小さな子供だってパパやママに内緒があつたりする。大人になれば、その内緒は、本当に内緒だったりしていくのかも」

「じゃ、ここだけの話だけど……」

そう言いながら話した美佐子の内緒は、永遠に私の胸の奥にしまっておこう。

「みて、桜のトンネル」

疲れてた美佐子の表情が少女のように変化した。

車で走る道は、桜が左右に咲いていてまさにトンネル。ハラハラと風に花びらが舞っている。

桜のトンネルを抜け、開かれた道は、まるで私と美佐子を歓迎するように、広く長く続いていた。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8311t/>

ぽつり、ぽつりと。～不倫＜薫編＞～

2011年10月8日16時30分発行